

Speech-Language-Hearing Therapist

# 言語聴覚士とは

リハビリテーションの専門職のひとつで、1997年に国家資格となった。音声機能、言語機能、聴覚の障がいや、嚥下（飲み込み）等の問題を抱える患者さんに対して、その機能の維持向上を図るため、症状や障がいを把握するための検査を行ない、科学的に分析し、訓練方針を立案して訓練・指導を行なう。機能の改善や、持てる能力の活用により社会的不利を軽減し、心理面のケアも含めて専門的立場から生活の質の向上を支援する。

## 言語聴覚士になるために ~宮崎さんが歩んだ道~



## 言語・脳機能改善をサポートするスペシャリスト

- ✓ 病態や病状を科学的に分析する知識と技術
- ✓ 患者さんの症状に自分のことのように親身に対応する根気強さ
- ✓ 患者さんと医師、スタッフと円滑に意思疎通するコミュニケーション能力

言語聴覚士に求められる 素質とスキル

## 現代のリハビリ医療に不可欠な存在

リハビリテーション医療には多くの専門職種がかかわっています。そのなかで言語聴覚士は、言語障害はもとより摂食嚥下障害や高次脳機能障害など多様な障がいを扱い回復をはかっています。リハビリテーション医療で扱う障がいは多様化、複合化しており、言語聴覚士の重要性はますます高まっています。

川崎医科大学附属病院 リハビリテーションセンター長 リハビリテーション科 教授  
花山 耕三



主治医を中心として他職種と毎週カンファレンスを行なっています。



川崎医科大学附属病院リハビリテーションセンターでは、現在、言語聴覚士は26人所属。大学病院として研究活動も活発で、その成果をよりよい治療に生かしている。



発声のための筋力トレーニング、言葉を引きだすためのカードを使った訓練などを行ない、患者さんのコミュニケーション能力の改善を図る宮崎さん。家族に対する助言・指導も言語聴覚士の重要な仕事だ。

## 医療 >>> vol.46

### 最前線

川崎医科大学附属病院

### 言語聴覚士

リハビリテーションセンター 主任  
宮崎 彰子 Akiko Miyazaki

Report!

# 話す、聴く、食べる… その喜びを支援する



## 失語症、高次脳機能障害… 心と身体の回復をサポート。

柔らかな口調、優しい笑顔で患者さんに語りかける宮崎彰子さんは、川崎医科大学附属病院リハビリテーションセンターに所属する言語聴覚士（Speech-Language-Hearing Therapist）の中心メンバーとして活躍中。当センターの中心メンバーとしてさまざまな業務に取り組んでいる。「言語聴覚士は、リハビリテーションのなかでも、おもに言葉によるコミュニケーションに関わる領域を担当します。声が出にくい、うまく話せない、話が理解できない、文字が読めない、聴こえが悪い。病気や事故や加齢による方、生まれつき不自由な方。小児から高齢者まで、さまざまな患者さんがおられます」。宮崎さんが所属するリハビリテーションセンターには、現在、理学療法士、作業療法士、言語聴覚士あわせて百十六人が勤務。それぞれが高い専門性を生かしながら、患者さんの訓練にあたっている。

「当院は二〇二二年に岡山県の高次脳機能障害支援拠点機関になり、それ以降、高次脳機能障害では県内の中心的役割を担っています」。高次脳機能障害は、脳に影響する事故や病気、たとえば交通事故や脳梗塞などの後に、同時に複数のことができない、仕事の優先順位がつけられない、新しいことが覚えられない、近所で迷うなど、日常生活や職業生活が困難になるさまざまな症状が見られる。「私は、小児ワーキンググループの責任者として小児を担当しています。高次脳機能障害は、発達障害との識別も重要です。訓練も、小さい時は根気が続きにくいので、自信を喪失させないように、興味をもつようにしむけるなどの工夫をしています」。

当院ならではのリハビリテーションの特徴は、「急性期治療の早い段階で、リハビリテーションスタッフがかかわることです。ドクターヘリや救急車で搬送された際も、その翌日といった早い段階からかわるので、患者さんの早期社会復帰への可能性が広がります」。

## 患者さんへの熱い思い、仕事への誇り。 患者さんの笑顔・喜びがやりがい。

もともと宮崎さんが言語聴覚士をめざすようになったきっかけは？

「祖母が難聴でひどく苦労していました。母も軽度の難聴でしたから、いずれは祖母のようになるのか、どうにかならないか、と高校生になった時に思ったのがきっかけです。長いキャリアのなかで、言語聴覚士としてやりがいを感じる瞬間は、「言葉が話せるようになってきたり前のように思われますが、まったく話せない状態の子ともさんが『ママ…』と一言言えた時は本当に感動しました。言葉が出ない、しゃべれない、どうなるんだろう、ずっとこのままだろうかと毎日心配してきたお母さんたちと一緒に訓練してきただけにその感激はひとしおでした。また脳卒中の発症後に言葉が話せない状態になっても、復唱や音読により、発話を促進できることがわかった時も言語聴覚士としてのやりがいを感じます」。

ひと言ひと言から患者さんへの熱い思いと仕事の誇りが伝わってくる宮崎さん。言語聴覚士としての充実した日々が全身から伝わってきた。

お問合せ  
川崎医科大学附属病院（倉敷市松島5-7）  
0864621111  
<http://www.kawasaki-med.ac.jp/hospital/>